

(正井)植村文楽軒(初代) 人形浄瑠璃を復興させ、現代につながるその代名詞文楽座の始祖となった。

うえむらぶんらくけん

徳川吉宗没・1751 = 淡路国飯屋浦で、道具商与兵衛の子に生まれる。通称道具屋嘉兵衛。

\_\_幼時から天才ぶりを発揮して、家に入出入りする人たちの語る義太夫節を聞き覚え、

大岡忠光没・1760 = 9歳 :

・・・1763 = 12歳 : この頃から、\_\_淡路の人形座に加わり、文楽軒と称して、山陽・山陰方面を巡業するうち、

\_\_本場大坂でも太夫として通用するほどの腕前となり、

・・・1769 = 18歳 :

田沼意次老中1772 = 21歳 :

船蝦夷来 1778 = 27歳 :

この頃、結婚し、人形浄瑠璃低迷時代の大坂に住んで、道具屋稼業を続けるうち、

田沼意次失脚1786 = 35歳 :

寛政改革始・1787 = 36歳 :

異学の禁・・・1790 = 39歳 : この頃、\*自宅に離れ座敷を設けて、誰もが自由に使える浄瑠璃の稽古場にする、

松平定信引退1793 = 42歳 :

\_\_かつての浄瑠璃全盛時代をなつかしむ人たちが集まって繁昌するようになり、

ブート来航・1796 = 45歳 :

\_\_これらのうちから、玄人の太夫・三味線・人形役者を選んで、

青洲麻醉手術1805 = 54歳 : \*人形浄瑠璃座を出現させる。

\_\_マネージメント役は妻が引き受け、金銭面の苦勞も、養家や妻の実家が融通してくれて持ちこたえるうち、人気を呼ぶようになり、文楽人気が定着し始めたところ、

・・・1810 = 59歳 : \_\_急逝した。  
以後、妻が健在で子の技量も優れていたことから、現代まで続くことになる。